例えばもう一度あなたに会えるとして、

胡蝶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
例えばもう一度あなたに会えるとして、

【Ｎコード】
Ｎ４４１５Ｒ

【作者名】
胡蝶

【あらすじ】
死者は願う、もう一度愛しき者に会いたいと。生者は夢見る、愛しき者と過ごした過去を。それらの想いが重なり合い、そして――※『例えばもう一度あなたに会えるとして、』は海底くらげさんが投稿された『ＩＦ』の「あなたが、」をもとに、ご本人の了承を頂いた上で投稿しています。

始まりの合図（前書き）

記念すべき第一話なのに、えらい短い……！
ごめんなさいっ！！！

…それではどーぞ＼（＾＾）／

始まりの合図

――美しく咲き誇っている花も、やがては散ってしまう。
この世とても自然の定めとして、いつまでも生き続けられるものではない――

＊＊＊

――『現在』と『過去』
それは決して交わることはない。
過ぎ去った過去を悔やんでも、過去に戻ることはできない。

――『生』と『死』
それはこの世の絶対的な法則。
この世のすべてのものは生を受け、やがて死にゆく。

そして、死者は決して蘇ることはない。
どんな手段を使ったとしても。
…もしもこの法則が犯されたら、いったいどうなるのだろうか。

＊＊＊

季節は夏。
その夜、人々はうだるような暑さの中、眠りについていた。
人々は皆、夢を見ていた。

それは、愛しき者と過ごしていた過去の夢。
今はこの世に存在しない、愛しい者との大切な過去。
その夢から覚め、過去を思い出し笑みを浮かべる者、涙を流す者。
感じ方は人それぞれ。
だが、愛しい人を想う気持ちは皆同じ。

そしてその想いを抱えたまま、彼らはまた眠りにつく。

このとき、彼らはまだ何も知らなかった。
この眠りから覚めたとき、この世の法則を覆す信じられない出来事が起こるということ。
この世の法則が、狂い始めるということを。

始まりの合図（後書き）

まずは……
やっと投稿できたあああああああああああああ！！！！！！！！
…実は、海底くらげさんに『連載してもいいですか』宣言をしてからもうだいぶ経つんです。
テストで忙しくて、それが終わったと思ったら今度はタイトルに悩みに悩んで……！
悩んだ挙げ句、全く捻りのないタイトルになってしまいました。
すみません海底くらげさん↑

とゆーか……今回、本当に短いですね。
できるだけ前書き程度で終わらせようと考えていたら、こんな感じになってしまいましたｏｒｚ

さて、あらすじでも述べた通り、このお話は海底くらげさんの小説をもとに考えました。
なのでこのお話は私一人で考えたわけでなく、ほとんど海底くらげさんが考えられたものです。
たくさんのアイディアや助言も頂きましたし＾＾
皆さん、勘違いしちゃ駄目ですからねーっ！！！↑

そして、最後にもう一つだけ。
海底くらげさんが考えていた話の流れとは、きっとだいぶ違ってしまうことでしょう。
それでもどうか最後まで、温かい目で見守ってやって下さい＾＾

次の更新はだいぶ先だと思います……が、楽しみにして頂けたら幸いです。
それではまた！

夢の続きの続き（前書き）

たぶんわかると思いますけど……一応、新八視点です（笑）
前回を踏まえて、今回はちょい長め（？）に＾＾！
それではどーぞ！

夢の続きの続き

―チュン、チュン――――

小鳥の囀りが聞こえ、僕は目を開けた。
手探りで愛用の眼鏡を見つけて、それをかける。
ようやくはっきりとした視界になり、ふと思った。
それは昨日の夜に見た夢のこと。
……父上が、出てきた。
父上は笑って僕と姉上に手を振っていた。
それが本当にあった出来事なのかどうかは、僕にはわからない。
当たり前だが、人は物心ついてからの記憶しか持たないから。
そしてその夢を見た時、僕は夜中に目を覚ました。
現実に戻って、さっきのは夢だったんだと思うと、また睡魔に襲われて、もう一度目を閉じて眠りについた。
…するとまた、父上の夢を見た。
今度は父上が死ぬ間際の夢。
父上は、この先の侍の未来を愁いていた。

……そして今に至る。
小鳥の囀りを聞いて目を覚ます、という冒頭に繋がるのだ。
僕は頬を叩いた。
――そう、今のは夢。
父上はもう、この世にはいないのだから。
しっかりしなくては――

自分にそう喝を入れると、僕は自室を出た。
廊下を歩いていると、腹の虫が鳴っていることに気づいた。
……まずは朝食を作ろうかな。
姉上に朝食を作らせたら、また暗黒物質（ダークマター）が生み出されてしまうことだし。
そう思い、早足に台所に向かおうとした時だった。

――ガチャアアアン！！！

何かが割れる、音がした。
僕はびっくり仰天して、音のした方へと向かった。
その音はどうやら台所から聞こえたもののようだった。
姉上が皿でも割ったのだろうと思うのと同時に、姉上に先を越されたかと冷や汗を流した。

「姉上、大丈夫ですか？」

台所の手前から声をかけても、返答はない。
おかしいな、と思って、台所に入ろうとした時、懐かしい声が聞こえた。

「――――新八か。お前も大きくなったな」

「……え」

声がした方に顔を向ける。
そこに立っていたのは、あの頃と変わらない、僕らの――――

「…父、上……」

僕がそう言う前に、姉上が口を開いた。
信じられない、というように姉上は父上を見ている。
…それは当然だ。
だって……だって父上は、もう。

「父上……？…え……なんで、父上がここにいるんですか？」

「なんでって……新八、それはないだろ？ここは俺の家でもあるんだから」

「僕が言ってるのはそういうことじゃなくて……！」

「新ちゃん、やめなさい」

ピシャリ、とそう言ったのは姉上だ。
姉上は僕の前に立つと、どこからか持ってきたのか、はたまたいつも身近に置いているのかわからないが、いつもの薙刀を手に持ち、父上と思われるその人に向けていた。
姉上は言う。

「……父上はとっくの昔に死んだのよ。それなのに、私たちの目の前に現れるわけないわ。…あなたは父上の姿をした偽者。違う？」

姉上がそう言うと、その人はやれやれとため息をついた。
そして、言う。

「…もし……もし、死んだ奴が生き返ったとしたら、お前たちはどう思う？」

「「……！？」」

……そんな馬鹿な。
父上は確かに死んだ。
その父上が、この世に生き返ったって？
そんなこと――――

「んなこと信じられるわけ……ないでしょうがッ！！！！！！！」

姉上はそう言って、薙刀を振り上げる。
そしてその薙刀は、その人に当たった……はずだった。

「…危ねェ危ねェ。……お妙、お前は美人になったが、怖くなったもんだなァ」

その人は紙一重で姉上の一撃を避けていた。
その人の独特の動きも、まさに父上そのものだった。
それは姉上にも伝わっていたらしく、姉上は薙刀を離した。

「…本当に……本当に、父上、なんですか？」

姉上がそう言うと、その人は深く頷いた。
それを見た姉上は、その人――父上に抱きついた。
僕も父上のもとへと向かう。
父上は言った。

「悪かったな、二人とも。幼いお前たちを残しちまって。苦労かけたな」

姉上がそれに答えた。

「…いいんです。……でも父上？いったい、どうやってこの世に戻ってきたんですか？いつまでもここにいられるというわけではないのでしょう？…いつまで、ここにいれるんですか？」

僕は父上を見た。

姉上のそれらの問いには、僕も疑問に思っていたところだから。

……そして、僕は見た。

そう質問された父上は、悲しみを帯びた顔をしていた。

勘違いなのかもしれないけれど。

「……父上？」

…僕がそう声をかけると、父上ははっとして僕に笑顔を向けた。

そして言う。

「俺にも、詳しいことはわからないんだ。…さあ、朝飯にしよう。今日は俺が作るよ。新八、お前ももう職に就いているんだろう？」

「あ……ええ、まあ」

そう言われ、万事屋を思い浮かべる。

職と言えるかどうかわからないが……まあ、一応は職業だよね。

「だったらしっかり朝飯食ってけよな！」

それに返事をすると、父上は台所に向き直った。

今日の朝食はいつもより遅いのだろうな、と考えながら、僕は姉上と台所を後にした。

＊＊＊

「おはようございまーす」

そう言って、万事屋の玄関の扉を開けた。
いつもより遅めの朝食だったので（父上が作ったものだったから）、
もちろんここに来るのもいつもより遅かった。
それだからか、珍しく神楽ちゃんがリビングから出てきた。

「新八ィ、今日は遅かったナ。どうしたネ？」

「ううん、なんでもないよ」

そうアルカ？と首をかしげる神楽ちゃん。
……神楽ちゃんには言わない方がいいよね。
混乱するだろうし。
神楽ちゃんの横を通りすぎてリビングに入る。
見ると、すでに銀さんも起きていた。
明日は雨でも降るんじゃないかと思えてくる。
……あれ？
もしかして、父上が生き返ったのも銀さんが早起きしたせい？
……んなわけないか。
そんな感じで僕が何も言わないもんだから、銀さんが言った。

「どーかしたかァ、ぱっつぁんよォ？」

いつもみたいにあまり覇気のない口調。
でもやはり、どこか心配してくれているように感じる。
……やっぱり、二人には話すべきなのかな。
もしかしたら、二人の知り合いでも『生き返った』人がいるかもしれないし。

そう思った僕は、意を決して二人に言った。

「……銀さん、神楽ちゃん」

「なんだァ？」「？？？」

「……死んだ人って、生き返るんですかね？」

「「……」」

数秒の間。

その沈黙を破ったのは、二人の笑い声だった。

「ぶ……ぶはははは！ちょっと神楽ちゃ～ん、聞いた！？」

「聞いたアル！『…死んだ人って生き返るんですかね？』でショ？んなことあるわけないネ！！！」

「だよな～？…ぷくく……新八くん、恥っずかし～い」

「うぜーよお前ら。…ったく……仕方ないでしょう？本当に父上が生き返っちゃったんだから」

そう言うと、また二人は目を点にした。

……え、なんか僕まずいこと言った？

そう思っていると、銀さんが焦ったように言った。

「……え？ちょ、新八くん？……それ、マジじゃないよね？嘘だよね！？」

「嘘じゃないですよ。今から本人連れてきましょうか？」
そう言うと、幽霊嫌いの銀さんは大げさに騒ぎ出した。
「え、ちょ……嘘だろ嘘だろ！？それ絶対スタンドだって！幽霊だって！」
「銀さん、それが幽霊じゃないんですよ。実際に触れるし、仕草も父上のものでした」
「……まじで？……いやいやいやいや、ないない、それはない。銀さんは信じないぞー」
そう言って、隣の寝室へと向かう銀さん。
「あ、ちょっと！どこ行くんですか銀さん！！！」
「ちょっと寝るわ。スタンドの話聞いてたら気分悪くなってきた」
スタンドじゃないっつの！
そう言おうとしたが、銀さんが戸を閉める方が早かった。
まったく、と呆れながら僕は神楽ちゃんの方を向いた。
神楽ちゃんはどう思っているのか、意見を求めるために。
口を開こうとした瞬間、これまた先に神楽ちゃんが言った。
「……私、嘘つく男は嫌いアル。しばらく私に近づかないで」
そう言って、神楽ちゃんは押し入れに入っていってしまった。
ぽつん、とその場に一人取り残された僕。
虚しく一人呟いた。

「……ひどくない？」

その呟きに答えてくれる者はいなかった。

……帰ろうかな。

どうせ今日も仕事はこないだろうし。

なんか僕、寂しい人みたいだし。

……いやいや、全然寂しくなんかないけどさ。

「……帰ろう」

そう呟いて、玄関の方へと歩き出す。

そして、万事屋をあとにした。

夢の続きの続き（後書き）

しばらくは新しい展開をやらないで行こうと思います。
『あなたが、』を私の捉え方で詳しく長々と書いていこうかなと。
あ、いつかはちゃんと付け加えるんで、ご心配なく！たぶん！↑

柔らかに咲く、（前書き）

キャラ崩壊が激しいかもしれませんｏｒｚ
というか、名前の漢字ちゃんとあってるのかな……？

まあとにかく、今回は土方視点です＾＾
それでは、どーぞ！！！

柔らかに咲く、

――新八が父親に再会したそれと同日、真選組屯所――――
真選組副長、土方十四郎は、屯所内のある木の下にいた。
それは、じきに美しい色をつけるであろう紅葉の木。
土方は、様々な色をつけた紅葉を頭に浮かべながら一人の女のことを考えていた。
あいつは紅葉がよく似合っていたな、と思いながら――

その女――――ミツバは、自分で言うのもなんなのだが、俺が唯一惚れた女。
そして、真選組一番隊隊長、総悟の――

――ドガアアアン！！！！！

その爆発音に驚いていると、何やら自室の方から煙が上がっているのが見えた。
あんのヤロー……！
そう思いながら、今考えていたミツバの弟、総悟を思い浮かべた。
また俺の寝込みを狙って、俺を亡き者にしようとしてたのかあいつは。
…てか……あれ？
俺の部屋じゃん、あそこ。
……なんか煙上がってるゥゥゥゥゥゥ！！！！！

ちょちょちょ、まじで燃えてるから、萌えてるから！
…いや違う、燃えてるから！！！
今まで部屋燃やされるとかなかったんだけど！
どういうつもりだあのヤロー！
そう心の中で文句を言っていた。
とりあえずはあの炎上を止めにいかなくてはと思い、一歩踏み出した。
……その時だった。

「――――十四郎さん」

凛とした声が響いた。
それは背後から聞こえた。
……そんな馬鹿な、この声は。
いや間違いなくそうだ、俺をそう呼ぶのは、ただ一人。
今の今まで頭に思い浮かべていた人物。
昨日、夢で再会した女。
振り返ると、やはり女――ミツバが、立っていた。
目が合う。
ミツバは微笑んだ。
だが、俺はすぐ、目を逸らしてしまった。
何せ俺は、こいつが死ぬその時すら、最期を看取ってやろうとしなかった、最悪の男なのだから。
そのまま俺が何も言わないでいると、ミツバがため息をつきながら言った。

「――やあね、十四郎さん。幽霊でも見たような顔、しないでくださいよ」

「……そんなんじゃ、ねーよ」

「……あら、だったらどうして私と目を合わせようとしないんですか？」

ミツバは楽しそうに、ころころと笑う。
逆に俺は、聞きたいことが盛りだくさんで、笑っているひま、むしろ再会を喜んでいるひまなどなかった。
そして、俺が今こいつに一番聞きたいこと。
それはもう、一生聞くことができないと思っていたこと。
何せこいつは、死んでしまったはずなのだから。

「……お前は、」

「はい？」

「……お前は、俺を恨んでねェのか？お前を突き放した俺を。……お前の最期を、看取ってやらなかった俺を」

そう問うと、ミツバはそんなことですか、と呟きながら言った。

「恨んでなんかいません。…どうして私を置いていくんだって、そう考えたことはもちろんありますけど……でも私は確かにあの時、『幸せ』だなって感じたんです。十四郎さんにそーちゃん、それに近藤さんみたいな、素敵な人たちと出会うことができて」

「……」

俺は何も答えることができなかった。
こいつに恨まれていなかったことの安堵感と（まあ今さら誰それの恨みが増えたところで何も変わりはしないが）、こいつが後悔なく

幸せだと感じながら最期を迎えていたことが、なんだか嬉しくて。
それにしても、とミツバが続けて言った。
普通、どうして自分がここにいるのかとか、そういうことを先に聞かないのか、と。
そりゃそうだ、と俺は頷いた。
それを見たミツバは、自分でも答えることができないけれどと、またころころ笑った。
俺はまた問う。

「答えらんねェって、どういうことだよ？」

「――そのままの意味ですよ。あまり、覚えてないんです」

…覚えてない？
いったいどういうことだ。
まさか神様の悪戯、とでも言いたいのだろうか。
そう思っていると、背後から声がした。

「――――姉上ッ！？」

そう言うのはもちろん、ミツバの弟、総悟。
俺は振り返らなかった。
総悟とはミツバとの件でまあいろいろあったから。
そこでふと、総悟の他に別の気配を感じた。
近藤さんか？いや何かが違う、そう思っていたときだった。

「マジですかィ……まさか、姉上まで生き返ってるなんて」

「――――――ッ！？」

……姉上『まで』？
どういう意味だ、そりゃあ。
まるで、こいつの他にも生き返った奴がいるみたいな……。
まさか、総悟の隣にあるもう一つの気配は……！

「――やあ。君も久しぶりだね、土方くん」

――伊東鴨太郎。
鬼兵隊と手を組み、近藤さんを殺そうとした人物。
…なんで、こいつまでここにいやがるんだ。
総悟に問う。

「……おい、総悟。なんで伊東がいるんだよ」

「知りやせん。土方さんの部屋をぶっ飛ばしたら、いきなり後ろから声かけられたんでさァ。……つーか土方さん、ちょっとどいてくれやせんか？俺、姉上と話したいんですけど」

「そうか……」

そう言って、俺はその場から離れようとした。
総悟もこいつと話したいことがあるだろう。
問いただすのは別に伊東でも誰でも構わない。
そう思ったが、はたと止まった。

「おい総悟……お前今、俺の部屋ぶっ飛ばしたっつったよな？」

「……？それがどうかしたんですかィ？」

「どーしたもこーしたもねェだろが！テメーはいったい何やってん

だ！！！」

「いやだから、土方さんの部屋をぶっ飛ばしに……」

「んなもんわかってるわ！！！」

そうして取っ組み合いになった俺たちを見て、二人が笑う。

「ふふ……十四郎さんもそーちゃんも、相変わらずね」

「全くだ。……ああ、ところであなたは、沖田くんのお姉さんですか？」

「ええ、そうです」

「これはこれは。美しいお姉さんを持って、沖田くんも幸せでしょう」

「まあ、伊東さんったら」

何やら痴話喧嘩のようなものを聞いているようで、あまり面白くはなかった。

それは総悟も同じようで、互いに争う手を止めている。

特に総悟は気にくわなかったようで、無言でミツバの前に立った。

「……伊東さん、いい加減にしてくだせェ。姉上がいくら美人だからって、口説こうとしてるつもりですかィ？」

「ちょっと、そーちゃん」

「……それはすまないね、沖田くん。そんなつもりは別にないよ」

まるで火花を散らしながら睨み合う二人。
そして蚊帳の外の俺。
……この言い争いに巻き込まれるのは御免だ。
一旦、気分転換をしよう。
このあり得ない事態によって乱された心を落ち着けよう。
久々に見たあの優しげな笑顔に、声に、柄にもなく昔を思い出してしまっていた。
……らしくないこと、本当にそう思う。
は、と自嘲気味に心の中で笑うと、屯所から出ようとした。
後ろから俺を引きとめる女の声がしたが、振り返らなかった。

柔らかに咲く、（後書き）

今回の題名、『柔らかに咲く、』のあとには、『君の笑顔』とつながるわけです。
早い話、ミツバさんの笑顔ってことですね＾＾

……というか、なんだ今回！
ミツバさんモテモテやん！
沖田は弟だしミツバさんを心配するのはわかります。
土方はミツバさんと両想いだったんですよね、それもわかります。
……伊東ｗｗｗ

わけわからん文ですみません。
次回は同じ境遇の二人がばったり……て感じです。
あ！そんなに期待しちゃだめです！
今回みたいに、グダグダわけわからん感じでいくんで（笑）
それではまた！

永遠になる方法（前書き）

ちょっと遅くなっちゃってすいませんでしたあああああ！！！

……次も更新が少々遅くなるかもしれないですｏｒｚ

それでは第四話、どーぞ！

永遠になる方法

屯所を出た俺。
さて、これからどうしたものか。
行くとこもねーしなァ……。
ましてや、『死人がいきなり生き返ったんで、気まずいから泊めてくれ』なんて言えねーし。
……まあ、あいつらが『生き返ってここにいる』という保証はないわけだが。
だとしたらなんだ？
あいつら、幽霊か？
……いやいや、幽霊とかありえないだろ。
第一、俺ァ直接見たモンしか信じねーし？
…あ……つーか俺、直接見ちゃってるわ。
いやいやいやいや……信じてるわけじゃないけど？

そんな感じに自問自答を繰り返していたが、やがてその考えをぴたりと止めた。
……恐らく奴らは、幽霊などではない。
そうあってほしいと願っている自分がいるのも確かだが、もっと別の理由があった。
普通、幽霊の類いに出くわした場合、寒気がしたり、恐怖感が湧いたりするはず。
だが俺の場合、逆に恐怖など感じなかった。
むしろ、暖かいと感じたくらいなのだから。

……とにかく、他にも俺のような境遇の奴はいないものだろうか。
あ、勘違いはよせよ？
『幽霊見た奴』じゃないからな？
あくまでも、『死んだ人間に会った奴』って意味だからな？
同じのようで違うんだなコレが。
そう思いながらすたすた歩いていると、声をかけられた。

「……あ、土方さん？」

顔を上げると、そこには万事屋のメガネが立っていた。
メガネは言う。

「どうしたんですか？見回り……なわけないですよね、私服だし」

そう言われて、自分の格好を改めて見る。
そういや今日は、仕事がオフだった。
そしてもう一度顔を上げ、メガネを見る。
なんだか生気が抜けているような、そんな感じがした。
そこで、持ち前の勘とやらが働いた。
もしかしたら、こいつも俺と同じ『経験』をしたんじゃないかと。
いやまさかな、そう思ったとき、メガネが口を開いた。

「――――あの、土方さん」

「……なんだ？」

そう言うと、メガネは言いずらいのか、視線を落とした。
そしてそのまま一言、信じられなかったら聞かなかったことにしてくださいね、そう言った。

そのまま何も問わないでいると、やがてメガネは決心したように顔を上げた。

「…もし……もし土方さんが、死人が生き返るって話を聞いたら、どう思います？」

「……！！！」

メガネはそう言うと、また視線を落とした。
俺はというと、驚いて何も言葉を発することができなかった。
口にあった煙草を、落としてしまう程に。
それに気づいたメガネが不思議そうに俺を見た。

「……土方さん？」

そう言われて、はっとした。
また新しい煙草を口にくわえて、心を落ち着かせる。
煙を吐き出してから、メガネに言った。

「……メガネ。お前、死んだはずの人間に、会ったのか？」

そう問うと、メガネは目を大きく見開いた。
まるで、図星とでも言うように。
メガネはしばらく目を泳がせていたが、やがて観念したように言った。

「……さすがですね、土方さん。……その通りです」

「……メガネ。俺も、お前と同じかもしれねェ」

「……え？…会ったんですか、死んだはずの誰かに」

「ああ。確証はないがな」

お前のとこは誰が生き返ったんだ、そう問うと、どうやらメガネの親父さんが生き返ったとのこと。

その問いのお返しに、土方さんは誰に会ったんですか、そう聞かれた。

あまり答えたくはなかったが、一応、伊東鴨太郎と総悟の姉貴だ、そう答えた。

「伊東……って、あの真選組内で反乱を起こした？」

「そうだ」

「そうだったんですか。……てゆーか、あれ？沖田さん、お姉さんいたんですか？」

「……なんだ、お前は知らねーのか」

「知らないですよ！…あ、また僕だけ蚊帳の外か、そうかそうか」

あはははは、と壊れたように不気味に笑うメガネ。

……こいつ、絶対冗談で言ってねーな、コレ。

性格上、フォローを入れないわけにもいかず、俺はメガネに言ってやった。

「……なんか、あったのか？」

俺が話を聞いてやることで、フォローになるのかはわからないが、

とりあえずは聞いてやった。
ゆっくりと顔を上げたメガネ。
微妙に涙目になっているのは気のせいだろうか。
そしてメガネは、聞いてくれるんですか、そう俺に問う。
それに静かに頷いてやると、メガネはやがてぽつり、ぽつりと話し出した。

「……僕ね、最初はこの話、銀さんと神楽ちゃんには話さないつもりだったんですよ。でも、二人が僕を心配してくれるもんだから、僕は二人に言ったんです。『死人って生き返るのかな』って。そしたら……」

「…そしたら？」

「そしたら……二人とも、その話を聞いて大爆笑したんですよ！！！酷いと思いませんか！？」

くっだらねェ……！
正直、そう思った。
第一、人をけなすために存在してるようなあいつらにそんな話をするお前が馬鹿だろ！
そう言ってやりたい。
だが、目の前の奴を見ると、すでに目がすわっている。
下手なことは言えねェ……！
そう思った。
俺が何も答えないでいると、メガネは不思議そうに俺に言った。

「……土方さんも、僕みたいなこと言われました？」

「いや……総悟も俺と一緒に見てたから」

「そうですか。はは……やっぱり読者に好かれてる人は得ですね」

「……」

……しまったァァァァァ！！！

言ってはいけないことを言ってしまったァァァァァ！！！！！

全然フォローできてねーよ！

掬い上げてやるどころか、地に叩き落としちまってるよコレ！

まずい、どうにかして収拾をとらなければ！

そう思っていると、メガネは暗い声色のまま言った。

「……僕、土方さんが羨ましいです。僕は酷い扱い受けてるのに」

悲しそうに言うメガネ。

一方俺は、フォローを入れるならここしかない、そう思った。

「気にするこたァねーよ。……この事実を知る俺らで、こいつを解決すりゃいいんだからな」

ちらり、とメガネは俺を見る。

頷いてやると、メガネは元気よく返事をした。

それを見て、ようやくフォローできた、と安堵する。

と同時に、どうして自分はこんなくだらないことに気力を使ったのかと疑問に思った。

馬鹿か俺は、そう思っていると、メガネが言った。

「……でも土方さん、僕らだけでいったい何をするんですか？」

そう言われて、俺は自分が何も考えていなかったことに気づいた。
一瞬考えたが、すぐに答えを出した。

「……とにかくだ。まずは俺たちと同類の奴を探すこと。もう一つは生き返った奴の中で、どうして生き返っちまったのか知ってる奴を探すことだ。……俺たちにできんのはまだ、これくらいしかねェだろう」

「そうですね」

「それに……お前もわかってんだろ？死人がこの世にいるってことが、どれほど理に反してるのか」

「……はい」

「奴らは死んだ。死んだ奴は生まれ変わることはあっても、生き返ることはない。永遠にな。……そんな方法はどこにもないことは、テメーもわかってんだろ？」

メガネは顔を引き締め、もう一度はい、と頷く。

「……じゃあとりあえず、しばらくはお互い情報収集をしましょう」

「…ああ。明日のこの時間、またここでおちあうぞ」

「わかりました。それじゃあ」

そう言って、メガネは頭を下げると、歩いていった。
その足取りは、どこか軽くなった気がする。

……さて、俺はとりあえず、屯所に戻るとするか。
伊東にはまだ、話を聞いていないのだし。
だがそうは言っても、やはり先ほどの光景を思い出してしまう。
…また蚊帳の外にされそうな気がするな……。
その考えを振り払うように頭をぶんぶんと振り、気持ちを切り換える。
そして、屯所へと歩みを進めた。

招かれざる客人たち

もうすぐ、万事屋に到着だ。
僕は、先ほどの土方さんとの会話を思い出した。
……情報収集、だったな。
そう思いながら階段を上ろうとすると、なんだかお登勢さんのスナックが騒がしく思えた。
耳をすませると、どうやらそこには銀さんと神楽ちゃんも混じっているようだ。
こんな朝から珍しいな、と不思議に思いながらスナックの扉に手をかけた。
ガラッ、と戸を開けると、突然皆シンとなり、こちらを見た。
……え、何？
僕、入ってくるタイミング悪かった？
それを口にしようとしたが、僕よりも早く口を開いた者がいた。

「――――お登勢、こいつは？」

……ん？
聞いたことないな、この声。
声のした方を見ると、そこには一人の男性がいた。
お登勢さんの方を向いていて、顔は見えない。
一見、土方さんのように見えなくもないが、声が、醸し出している雰囲気が、違った。
恐る恐る、僕は問う。

「あの……あなたは？」

「あたしの死んだ夫、辰五郎さ」

男性に聞いたつもりだったが、代わりにお登勢さんが答えた。

……『死んだ』、夫？

僕はばっと銀さんを見た。

目が合った。

……逸らされた！

僕は血走った目を銀さんに向けて言った。

「何逸らしてんですか！？ほら、僕の言ったこと合ってたじゃないですか！」

「あー」

「あー。じゃないですよ！散々人のこと馬鹿にしたくせに！！！」

「……はいはい、悪かったよ新八くん。…いや実はな、この人を最初に見つけたのは俺なんだよな。『お登勢はいるか』って聞いてくるもんだから、ここに連れてきたわけよ。そしたら、ババアの夫だったってオチな。銀さんびっくりだわ。失神しそうになったわ。…まさかこの人が旦那だったとはなァ……。ババアにゃもったいねーぐらいじゃねーの？」

後半は声を小さくして言っていたつもりなのだろうが、どうやらそれはお登勢さんに筒抜けだったらしい。

後ろから銀さんの頭に向かって、酒瓶が飛んできた。

それは見事銀さんの頭にクリーンヒットした。

銀さんは頭を押さえている。

「…おいおい、やめろよお登勢。……だがな、そこの銀髪の兄ちゃんも兄ちゃんだぜ？お登勢は昔は美人だったってこと、知らねーわけじゃないだろ」

お登勢さんの夫――辰五郎さんがそう言うと、また酒瓶が飛んできた。

あ、これも当たるのかな辰五郎さんに、そう思っていた。

だがどうやら辰五郎さんは慣れているようで、それをひょいと軽々避けた。

それを見ていて、お登勢さんは昔から怖い人だったんだなあ、と実感する。

……だって酒瓶だからね？

普通避けられなくね？

そう思っていると、お登勢さんの怒号まで飛んできた。

「あんた、昔はってどういうことだい！？」

その怒号に言葉を濁した辰五郎さん。

顔には苦笑いが浮かんでいた。

気まずい……！！！！！

誰もがそう思った瞬間、ザッザッとスナックの外から足音が聞こえた。

その音がスナックの前で止まった瞬間、辰五郎さんはいらっしゃいませーと言いながら、逃げるように入り口へと向かっていった。

「ちょっとあんた！朝は営業時間じゃないんだよ！！！」

お登勢さんはそう言うも、辰五郎さんは構わずに戸を開けた。

そこに立っていた人、それは。

「――――辰、五郎？」

「？」

そう辰五郎さんに声をかけた人物、それは仙望郷の女将、お岩さんだった。

辰五郎さんはお岩さんだと気付き、楽しそうに話していた。

その一方、お岩さんを見た僕と銀さんは、その場で固まった。

……どうしてかって？

それは当たり前。

またあの最強の霊（スタンド）を連れていると思ったから。

僕たちがキョロキョロと辺りを見回していると、それを見たお岩さんが僕たちに問う。

「どうしたんだい、あんたたち？えらく忙しないじゃないか」

「…いや、まあ……あんたのスタンド……いやいや、夫のＴＡＧＯＳＡＫＵ……来てねェの？それにレイも」

そう問うのは銀さん。

何やら知らない名前が出てきたけど……それってもしかして、全部幽霊だったり？

……いやいや、まさかね。

そう思っていると、お岩さんが後ろを指差しながら言った。

「いいや、来てるよ。あんたたち二人にしか見えないだろうけど」

お岩さんがそう言い、入ってきた二つの人影。

それは男性と女性の霊。
…でも、幽霊にしてはやけにはっきり見えているような……？
だって普通の人間と同じように見えるもの！
透き通ってないもの！
そこで僕ははっとした。
幽霊が見えないはずの僕と銀さん以外の人たちが皆、幽霊だと思われるその二人を見つめていた。
まさか、そう思い、僕は皆に恐る恐る尋ねた。

「…まさか皆さん……見えてる、なんてことないですよね？」

は？と声をあげるお岩さん。
それに構わず、神楽ちゃんが答えた。

「見えるに決まってんじゃねーかヨ。お前、私たちをおちょくってるアルカ？」

「「〜〜〜〜〜ッ！！！！！」」

言葉にならない声をあげた、僕と銀さんの二人。
その隣では、お岩さんが驚いたように口を開いた。

「あんたたち皆、幽霊見えるようになったのかい。…うちの旅館で働いてくれると助かるねェ」

冗談まじりにそう言ってくるお岩さんに、銀さんは切羽詰まった様子で言った。

「ふざけんじゃねーぞババア！こいつらが見えるようになったわけじゃねェんだよ！そいつらが実体化しちゃってんの！生き返っちゃ

ってんの！！！」

「……そうなのかい？あたしゃ、いつも幽霊が見えてるからねェ、気づかなかったよ。……そうか、背後霊のくせに今日はやけに隣にいると思ったら、そういうことだったのかい」

「……気づくとこ、そこ？」

僕のツッコミを無視し、お岩さんは続ける。

「……とすると何かい？あんたもレイも、生き返っちまったってことかい？」

「――そうみたいだよ、女将」

答えたのは幽霊のレイさん。

あ、今は幽霊じゃないんだけど…格好が幽霊と変わらないというかなんというか……。

そう思っていると、レイさんは続けた。

「私も最初は気づかなかったよ。自分の体がいつもと違って半透明じゃないのは気づいていたんだけどね」

「そうなのかい？なんだいあんたら、とんだお馬鹿さんだねェ」

お岩さんがそう言うと、皆がどっと笑い出した。

……いや、笑ってる場合じゃないでしょーが！

この人たち皆、事の重大さが全然わかってないよ！

死人が生き返ったっつーのに、なんで笑っていられるんだ、この馬鹿どもは！

とゆーか、むしろ打ち解けちゃってるし！

……拝啓、土方さん。
報告することができました。
一つ目は、僕の身近で他に3人が生き返ったこと。
もう一つは、死んだはずの人間と普通に接している馬鹿どものことです。
……ああ、これを言ったらきっと土方さん怒るだろうなあ。
もっとマシな情報持ってこい、とか？
そう思うと、皆が笑っている中で僕は一人、憂鬱になった。

母は強し

―――○月×日　△ようび

きょうもまちではしんだひとがいきかえったようです。
おとせババアのだんなさんもいきかえりました。
おかみのだんなさんもいきかえりました。
そのふたりだけでなく、どうやらかぶきちょうじゅうでしんだひとがいきかえっているようです。
でも、いきかえったひとにあったひとたちは、すごくうれしそうです。
それをみて、わたしはうらやましくおもいました。
わたしもマミーにあえるかもしれないと、きたいしてしまいます。
きっとパピーもそうおもっているとおもいます。
だから、あしたはマミーにあえるといいな―――

私は日頃からつけている日記を書き終え、布団に潜り込んだ。
押し入れの中にいても聞こえてくる、銀ちゃんのいびき。
今日はよほど疲れたんだろう。
だって銀ちゃん、幽霊とか大嫌いだし。
そう思いながら、くすくすと笑った。
すると急に眠気が襲ってきて、私は一つあくびをすると、すぐに眠りに落ちた。

――次の日――――

寝ていた私は、バッと布団から飛び起きた。
ふごふご、と匂いをかぐ。
朝ごはんの匂いだ！！！
もう新八が来て、朝ごはん作ってるのかな？
時計を見ると、針は六時三十分をさしていた。
……今日はいつもよりずいぶん早いなあ。
そう思いながら、リビングの方へと駆けていった。
すると、声が聞こえてきた。

「…あ～……なんかすいません。知らねェ人に朝飯作ってもらっちゃって」

銀ちゃんの声。
私はそこで、あれ？と思う。
銀ちゃんは今、『知らない人』と言った。
『新八』じゃなくて、『知らない人』と。
じゃあ、朝ごはんを作っている人は誰……？
私はリビングに向かおうとする足を止めていた。
すると、『その人』が銀ちゃんに返す。

「いいのよ。…だってあなた、神楽の面倒みてくれてるでしょ？」

「まあそうですけどね、……て、え？……なんで神楽？」

―ドクン――――！
心臓が波打つ気がした。
二人のところへ行きたい衝動を押し殺し、その人の次の言葉を待った。

その人は、言った。

「…なんでって、だって神楽は」

「私の、娘だもの」

ドクン――――――！！！

…マ、ミー……？

……嘘でしょう？

本当に、マミーが生き返ったの？

私はおぼつかない足取りで、リビングへと向かった。

マミー、と呟きながら。

リビングに入ると、二人の視線を感じた。

私は顔を上げなかった。

その人に……マミーに、名前を呼んでもらうまでは。

すると、その人は言った。

「――どうしたの、神楽？あなたもこっちに来て、一緒に朝ごはん食べましょうよ」

「…ッ……マミー！！！」

私はマミーに飛びついた。

マミーはあらあら、と言いながらも私を抱きしめてくれる。

私がマミーの胸の中で泣いていると、銀ちゃんが言った。

「……なに？アンタ、神楽の母ちゃんなの？」

「そうよ」

「へ～……神楽は自分の母ちゃんべっぴんだっつってたけど、本当だったんだな」

「まあ、神楽ったら」

その会話を聞いているうちに私は泣き止み、鼻をすすって銀ちゃんを見た。

「銀ちゃん……マミーがいくらべっぴんだからって、狙っちゃダメアルヨ？」

「わあーってるよ。…だいたい、あの星海坊主の奥さんでもあるんだろ？絶対、夫を尻にしくタイ」

タイプ、と続けたかったのだろうが、それは阻まれた。
……マミーの鉄拳によって。
テーブルにめり込む銀ちゃん。
私は呑気にそんなこと言うから、とテーブルにあったお茶をすすっていた。
それを見たマミーは、笑顔で言った。

「……さ、神楽、銀さん。朝食にしましょう」

＊＊＊

モゴモゴ、と口いっぱいにお米を頬張る。
食卓に並んだいつもより豪華な朝ごはんで、食が進む。
思えば今まで、三食豆パンだったり、三食卵かけご飯だったなあ。
……あ、卵かけご飯は全然いいけど。

三食豆パンはキツかったなあ。
そう思っていると、銀ちゃんが言った。

「……なんか、思い出すよな」

「……何アルカ、銀ちゃん。年とった奴が昔を思い出すあれアルカ？」

「ちげーよ！だいたい俺、そんなに年いってねーし！お前の母ちゃんよか……あ、すんません」

マミーの視線を感じたのか、銀ちゃんは謝った。
一方マミーはというと、指をボキボキと鳴らしている。
それを横目で見て、顔を青ざめながら続ける銀ちゃん。

「いやな、俺が言いてェのは……ほら、アレだ。八郎の母ちゃん」

「八郎の母ちゃん？誰、それ？」

知らない名前に興味をもったのか、マミーが問う。
私が説明してあげた。

「ずっと前に依頼に来た八郎の母ちゃんアル。朝起きたらいきなり朝ごはん作ってたり、いきなり叱りだしたり、無茶苦茶な母ちゃんだったネ。もちろん、マミーの方がべっぴんアル」

「確かにありゃあすごかったな。……あ、でも煮物うまかった」

「それはそうアルナ」

そんな感じで話を続ける。
マミーは話をする度に相槌をうってくれた。
そこで、話をしていた銀ちゃんがはたと止まった。
私とマミーは不思議に思い、マミーが言った。

「……銀さん？どうかしたんですか？」

銀ちゃんは答えない。
マミーは私の方を見ると、目で合図した。
たぶん自分じゃ無理だから私がやれってことだろう。
私は銀ちゃんに言う。

「どうかしたアルカ銀ちゃん。……もしかして、幽霊見たことでも思い出し「……お前さ、」

「……？？？」

「お前、八郎の母ちゃんが来たとき……自分の母ちゃん、星になったって言ってなかったっけ？」

私はそのときのことを思い出す。
そして、ああと頷いた。

「言ったアルヨ？」

「やっぱ？なあーんだそうか、そりゃよかった……てよくないよくない！！！……は！？何それ！？じゃあこの人もスタンド！？」

「違うアル！！！」

「じゃあなんなんだよ！第一、テメーはなんで死んだ奴がいんのに冷静なんだよ！」

「マミーは……！ッ…マミーは、私が生き返ってほしいって思ったから、生き返ってくれたアル！」

じわり、と涙が滲んでくる気がして、私は二人に背を向けた。
神楽、とマミーが私を呼び、腕をひろげているもんだから、私はまたマミーの胸に飛びついた。
……マミーが帰ってきたからか、私は昔に戻った気がする。
涙もろくなった気もするし、また弱くなったのかな？
すると、私は神威を思い出した。
マミーと神威を、会わせてあげたい。
そうすれば、神威はまた私たちのところに帰ってきてくれるのかなあ？
……なんてね、そんなのはきっと無理。
そう思うと、また涙が溢れた。

しばらく経つと、後ろからぼりぼりと頭を掻くような音がした。
それが止んだあと、ずっと黙っていた銀ちゃんが口を開いた。

「……悪かったな、神楽。……それに母ちゃんも」

そう言われた私は振り返らなかったけれど、小さく首を振った。
……そう、別に怒っているわけなんかじゃない。
ただ、マミーの存在を否定されたようで、悲しかっただけ。
私は涙を拭うと、銀ちゃんに言った。

「…私も、ごめんアル銀ちゃん。急に、大声出したりして」

そう言うと、銀ちゃんが立ち上がったような気配がした。
私は顔を上げ、銀ちゃん？と呟いた。
銀ちゃんは何も言わないで玄関の方へと向かっていく。
リビングから出るとき、一言だけ言った。

「……ちょっくら、パチンコ行ってくらァ」

そして銀ちゃんは、ガラガラ、と玄関の戸を閉めた。

「こんなときにパチンコ、アルカ？……本当に呑気な奴ネ」

「そう？あの人なりに、気を使ってくれたんだと思うけど」

「そうなの？」

「そうよ」

そうして私とマミーは、くすくすと笑った。
……アリガト、銀ちゃん。
私の気持ち、わかってくれて。
そう思いながら、銀ちゃんが出ていった玄関の方を、私はしばらくの間見つめていた。

真実は何処に

「……あーあー、まったくやってらんねェよ。なんなんだよチクショー、なんで死んだ奴が生き返ってんだよコノヤロー」

ぶつぶつ言いながら道を歩く。
パチンコに行くと万事屋から出てきたが、とてもそんな気分にはなれなかった。
だってスタンド…いや違う、神楽の母ちゃんがね、うん。
はあ……とため息をつきながら周りを見渡すと、なんだかふわふわしているような空気を感じた。
……ったくよォ、どいつもこいつも浮かれやがって。
死人が生き返ったってのがそんなに嬉しいのかねェ。
……つーか、普通に考えたら大問題じゃねーのかコレ？
というか、なぜ奴らは生き返ったんだ？
そう考えていたのだが、夏の暑さと蝉のうるさい鳴き声で、だんだん集中力が切れてきた。

「ッ……くっそ！！！オイコラ蝉！うっせーよテメーら！！！」

そう叫んでみたが、もちろん鳴き止むはずもなく。
代わりに周りの奴らから白い目で見られていたので、一つ咳払いをしてから、足早にその場を去ろうとした。
だが、歩き出そうとしたその足はピタリと止まった。
見知った二人を見つけたのだ。

……いや、見知った二人なのだが……この二人のツーショットなんか今までであったか？と、そう思えるくらい稀なツーショットだ。
それは誰かというと、万事屋の雑用係でお馴染み新八くんと、マヨネーズ中毒でお馴染みマヨラーくん！
……やばくねこの二人？
めちゃくちゃレアだろコレ。
声をかけようと近づいたが、二人は話に集中しているようで、こちらにまったく気づいていない。
なんの話をしているのか気になって、聞き耳をたてた。
すると、二人の会話が聞こえてきた。

「……メガネ、俺はなァ、死人が生き返った理由を探れっつったんだ。…誰それが生き返ったなんざどーでもいいんだよボケ！！！」

「仕方ないじゃないですか！全く情報が入ってこなかったんですから！……だいたい、そういう土方さんはどうなんですか？何かわかったんですか？」

「いや、それはお前……アレだよアレ。……わかってねェけど」

「なんですかそれ！人のこと全然言えないじゃないですか！！！」

「うるせーな！……チッ、やっぱこういうことは山崎じゃなきゃだめだな。…キャラが同じようなもんだから、大丈夫かもしれねェと思ったんだが」

「どーゆう意味だそれ！地味か！！！地味ってことかそれ！！！」

道端で騒ぎ始める二人。
見ているこっちが恥ずかしい。

……まあ、さっきの俺と同じようなもんだけど。
というかこいつら、どうやらここ最近起こっている死人が生き返る騒ぎについて調べているらしい。
そこでさっき、神楽が言った言葉を思い出した。
……アリ？俺、ちったァ情報持ってんじゃね？
マヨラーに情報を差し出すのは癪だが、俺もこの一件には少しばかり興味がある。
仕方ねェか、そう思いながら、未だ言い争っている二人に向かって一歩踏み出した。

「だいたい地味がどうとか、今は関係ないじゃ「オイ、新八」

「……あれ、銀さん？どうしてここに？」

「ま、いろいろあってな。……つーかお前らさ、話は全部聞かせてもらったから」

「ええ！？最初っからいたんですか！？」

「……まあ、そんな感じだ」

そう言うと、顔を見合わせた新八とマヨラー。
……うわ、ものすごく嫌そうな顔してるよ、このマヨネーズ中毒野郎。
こちとらテメーなんざに情報渡すのなんか嫌なんだよ！
俺の方が嫌なんだよ！！！
そう思っていると、マヨラーが言った。

「テメーはたぶん役立たずになるだろ。帰れ」

「……あっそう。そういうこと言っちゃうんだ多串くん」

「土方だ」

「せっかく新情報教えてやろうと思ったのになァ、多串くん」

「土方だ。……は？」

「だァかァら～新しい情報ですよ多串くん」

俺がそう言うと、身を乗り出して問いただしてきたのは新八。

「……えっ！？銀さん、どういうことですか？何か知ってるんですか！？」

頷くと、新八から早く教えてくれと催促される。

マヨラーを見ると、新八と同じように、聞きたいという文字が顔に出ていた。

それを見て、にやりと笑った。

「教えたいのは山々なんだよ新八くん。……だがね、ただで教えるわけにはいかないね」

「……え、どうすればいいんですか？」

「この場には多串くんもいるわけだし、多串くんも俺にちゃんと頼まなきゃ筋が通らねェだろ？」

「……あ、そうですね。じゃあ土方さん、お願いします」

新八がそう言うと、マヨラーはさらに嫌そうな顔をした。

「テメーら……！！！」

「仕方ないですよ、土方さん」

「そうそう。聞きたいならしょうがないよな～」

そう言うと、小さな声でわかったよ、とマヨラーは言った。
……え、嘘、まじで言うの？
明らかにプライド高そうなこのマヨラーが？
こりゃおもしれェ、そう思っていると。

「……なんて言うわけねェだろーが！！！！！！！」

まったくの不意打ち。
マヨラーの蹴りが、見事に俺の顎に的中した。
宙に浮く感覚がした。
それも一瞬で、すぐに地面に落ちる。
蹴られた顎を押さえながらマヨラーに言った。

「何すんだコノヤロー！！！」

「うるせェ！ごたくはいいから、とっとと話せ！！！」

「……いいのかい多串くん、そんなことを言っちまって」

「だからうるせェっての！無駄に文字数稼ごうとしてんのバレバレなんだよ！」

「そんなん俺に言われても困りますうー、作者に言いやがれ！！！」
「なんの話してんのあんたら！？」
新八のその無駄なツッコミで会話は止まった。
……あー、なんかこのやりとり疲れてきたわ、めんどくせーわ。
もう話しちまおう。
「仕方ねェ、教えてやるよ。実はな……」
俺は新八とマヨラーに、神楽の母親が生き返ったこと、神楽が言うには、『生き返ってほしい』と願ったら本当に母親が生き返った、ということを話した。
話を終えてもそのまま黙っている二人を見て、なんだか鼻高々になる自分。
どーだ見たか、俺は役立たずなんかじゃねんだよ、コノヤロー！
そう思っていると、話を聞き終えた二人が真顔で言った。
「「……そんだけ？」」
「え」
「本当にそれだけですか？」
新八にそう言われ、そうだけど、と頷く。
なに、何か不満なのコイツら？
すると、新八が言った。
「…銀さん、僕、別に『生き返ってほしい』とは思ってませんけど、

父上が生き返りましたよ？」

「……え？」

「……チッ、結局役立たずじゃねェか」

「なんだとコラ！！！テメーの周りでも誰か生き返ってんだろ！？
…テメーは願ったのか、生き返ってほしいってよ？」

そう言うと、マヨラーは煙草を一本取り出した。
煙草に火をつけ、吸う。
そうしてから一言だけ、さァな、と言った。
はっきりと否定しないところを見ると……。
にやり、と笑った。

「……さては沖田の姉ちゃん生き返ったな？そんじゃあテメーは願っちゃったんじゃないの～？」

「おいメガネ、今日は終いだ。なんかあったら、屯所に連絡しろ」

「わかりました」

……おーい無視か、コノヤロー。
こーゆうところにはつっこまないのな、新八くんは。
俺には一言も言葉を発せずに、歩いていくマヨラー。
……さては図星、か？
その小さくなっていく背を見つめながら、新八が言った。

「ダメですよ、銀さん。そういうことに首突っ込んじゃ」

「んだよぱっつぁん。そーゆうことってどーゆうことだよ？」

「そういうことです」

あっそう、と返すと、新八が思い出したように言った。

「……あ、今日は僕、万事屋に泊まりますね。神楽ちゃんのお母さん、早く見てみたいし」

「……なにお前、人様の母親だとはいえ、マザコンでもあったの？シスコンだけじゃ足りねーの？」

「違いますよ！ただの興味本意ですから！！！」

「へーへー、わあーったよ」

返しながら、ふと思い出す。

…そういや俺、パチンコ行くとかで出てきたばっかじゃん！

……なんか戻りにくくね？

まあいいか、新八いるし。

そう思いながら、二人で万事屋へと戻っていった。

真実は何処に（後書き）

今回はタイトルにめちゃ悩みました（´Д`）！
だってなくてもいいような話なんですもの（笑）
結局、なぜ死人が生き返ったということはわからずじまいですし。
ということで、もうなんでもいいや！と思って適当に考えちゃいました↑

さて、今回は銀さん、何度も『コノヤロー』と言ってますね。
別に特別な意味はないんですが、そういえば銀さん、よくコノヤローって言うよなーとか思って言わせてみました。
何回言ったんだろう？
めんどくさいので自分でも数えてないです（＾ω＾）笑
そんなに言ってないかな？
…そこで、はい！今これを読んでいて暇なあなた！
暇潰しに『コノヤロー』の回数を調べてみるのもいいかもです（笑）

最近、更新遅いですよね。
春休みの最初怠けていた分、課題に追われています。
ご了承お願いしますね！↑
感想もお願いします＾＾↑

それでは次回をお楽しみに！

会いたい、あの人に（前書き）

更新遅くなっちゃって本当にごめんなさい！
しかも短めです（＜＿＞）

会いたい、あの人に

『死人が生き返る』という奇妙な出来事から、早二週間が立った。
その間にも、死人は生き返り続けていた。
町中はすでにそんな奴らで溢れてしまっている。
俺自身、もう何人見たことか。
新八の親父に神楽の母ちゃん、お登勢ババアの旦那に源外のジーさんの息子、総一郎くんの姉貴に月詠の師匠などなど……もう盛りだくさんだ。
笑いたくなるが、全然笑えない。

だが、全員が生き返っているわけでもない。
……何せ、あの人はまだ生き返っていないのだから。
生き返ってほしいと願うわけではないが、どこか期待してしまっている部分というのも、もしかしたらあるのかもしれない。
そんなことを座りながら考えていると、神楽の母ちゃんが声をかけてきた。

「……あら、銀さん。どうかしたの？こんな朝早くに起きてるなんて珍しい」

洗濯物を抱えて出てきた神楽の母ちゃん。
万事屋の雑用係こと新八がこなしていた家事も、今では神楽の母ちゃんがやっている。
そのせいで新八はツッコミしか能がないただのダメガネになってし

まったわけだが。
母ちゃんに何でもないと返し、神楽は？と聞くと、まだ寝てるとの返答が返ってきた。
……もう、万事屋の生活にこの人がいることは、日常となってしまっている。
これは本当に、あっていいことなのだろうか？
そう思っていると、万事屋のチャイムが鳴った。

「……あら、誰かしら？こんな時間に」

「たぶん新八だろ」

「ああ、そうね。玄関鍵が閉まってるから、銀さん開けてきてくれる？」

「はあ？なんで俺がわざわざ行かなくちゃ「さっさと行く！！！！！」

「……はい」

しぶしぶ玄関に向かい、鍵に手をかける。
……まったく、神楽の母ちゃんにはどうも頭が上がらねー。
逆らったら殺されそうだもん。
絶対逆らわない方がいいと思う、アレはたぶん。
はあ、とため息をつきながら、勢いよく玄関を開けた。

「テメーコラ新八！テメーのせいで俺ァなァ……」

心地よい風が入ってきた。
それに伴い揺れる髪。

灰色がかったその髪は、もちろん新八のものではない。
新八の髪は、これほどまでに長くはない。
昔と変わらない笑みでそこに立っていたのは……

「――――松陽、先生」

松陽先生だった。

＊＊＊

「おはようございまーす」

ガラガラ、と玄関が開き、新八が入ってきた。
リビングに着いた新八は、食卓に並べられている朝食を見て神楽の母ちゃんに言った。

「わあ、今日も美味しそうですねお母さん！！！」

「ふふ、そうでしょう？さあ、早く座りなさい」

「はい！！！！！」

そして全員が揃ったところで、いただきますの合図。
各々、朝食を食べ始める。
しばらく無言だったのだが、新八が口を開いた。

「…あの……一つ聞きたいんですけど」

「なんだヨ新八？……まさか、マミーが作ったご飯にケチつけるつもりアルカ？」

「あらそうなの、新八くん？いい度胸じゃないの」

「違いますよ！お母さんの料理は美味しいですって！そうじゃなくて、あの……あなた、誰ですか？」

「……私、ですか？」

新八の視線の先には松陽先生。
その視線に気づいた先生は、新八にそう返した。
新八が頷くと、先生は少し苦笑しながら言った。

「それにしても、ずいぶん遅い反応でしたね。そんなに私、影が薄かったんですか？」

「いやいやいやいや、全然、そんなことないですよ！？」

「そうだぜー松陽先生ー、そいつが最近ツッコミサボってるだけだから気にすんな」

「サボってねェよ！！！！！」

荒々しく席を立ち、ツッコんだ新八。
…ほんとコイツ、ツッコミに命懸けてるよな、そう思った。
依然として俺を血走った目で見てくるので、はいはいわかったよ、そう言うと、新八は呆れたように席についた。
俺たちの言い争いを隣で見ていた先生は、微笑みながら言った。

「……すみません、まずは自己紹介からでしたね。……志村新八くん、といいましたか？」

「なんで僕の名前を……？」

「銀時から聞きました。そちらのかわいい子が神楽ちゃん、隣のお美しい方が神楽ちゃんのお母さんで、大きな犬が定春くん、でしたよね？」

「まあ、お世辞がお上手だこと」

「そーだぜ先生、こいつらにお世辞は必要な」――ゴッ！！！！！

俺が言い終わる前に、神楽の母ちゃんの鉄拳を顔面にくらった。

それすらもにこやかに眺めていた先生は、頭を下げながら言った。

「申し遅れました、私は昔、寺子屋の先生をやっていた、吉田松陽と申します」

「あ……ご丁寧に、どうも」

「他に何か、聞きたいことはありますか？」

「え？…いや、その……」

「遠慮せずに、なんでも聞いてください」

質問しようかしまいか悩んでいる様子の新八だったが、やがて決心がついたように言った。

「松陽さん……さっき、『寺子屋の先生をやっていた』って言いましたよね？」

「はい」

「『やっていた』っていうのは、まさか……」

質問の意味を理解したのか、先生は黙って頷いた。

「……新八くん、あなたの想像している通りだと思います。私は一度、死んだ人間です」

シン、と全員が静まり返った。

『松陽先生が死んだ』という事実は、変えることができないというのもまた事実。

俺だって、その事実を認めたくはない。

先生はきっとなおさらだろう。

向かい側から見た先生は、なんだか小さく見えた気がした。

会いたい、あの人に（後書き）

こんな感じで、更新が遅くなっちゃうと思います。
最近は忙しくて、休みがなかなかないんです！
許してくださいね↑

話を少し省いてしまいました。
源外さんの息子とか、月詠の師匠の話、入れたかったんですけどね
……残念です（，；ω；、）
というか、あんまり長編にならないような気がしてきた今日この頃です。
更新遅くても一生懸命頑張るので見捨てないでください！
お願いします↑

それではまた、次回で。

弾き出した答え（前書き）

皆さん、お久しぶりですっ！
こちらを投稿するのは、かれこれ４か月ぶり……くらいかな。
お待たせして、ほんっとにすみませんでした！

それではどーぞ（＾Ｏ＾）！

弾き出した答え

「……なァ、総悟」

俺がそう言うと、なんですかィ、と返事が返ってくる。
俺は続けた。

「俺ァ、どーすりゃいい」

「……俺にきかねーでくだせェ。俺が何を言ったって、どーせ聞き入れるつもりなんかないんでしょう、アンタは」

総悟のその言葉には構わず、俺は更に続けた。

「俺たちは、あいつらが生き返ったことを認めるべきなのか？……死者と生者が共生なんてできるわけがねーんだ。この世には……死者はいちゃいけねーんだよ」

すると、総悟は気にくわなそうに言う。

「……つーことはなんですかィ？アンタは姉上になんて会いたくなかったと？」

「……」

答えることはできなかった。
……会いたくなどなかった、そう言えば嘘になる。
だが、俺がそう思うのは今さらな気もする。
俺は一度、アイツを見捨てたクズだ。
そんな俺が、どうしてそんなことを口にできるというのか。
すると、総悟が言った。

「……アンタはいつもそうだ。姉上の気持ちも知らねーで、いつも姉上をつき放そうとしやがる」

「……」

「俺ァアンタが嫌いでィ。アンタは俺の全てを奪っていきやがる。姉上も、近藤さんも。…せっかく姉上が戻ってきたのに……アンタは、また俺から姉上を奪うつもりですかィ？」

「……」

「なんで何も言わねーんでさァ？図星ってわけですかィ？」

「……」

まだ口を開こうとしない俺に痺れをきらしたのか、総悟が俺の襟元を乱暴に掴んでから言った。

「ッ……テメー土方！たまには本音言ってみろよ！……姉上に会いたかったんじゃねーのかよ！？」

総悟がそう言うと、やめろ総悟、という声と共に、部屋に入ってくるその人。

「「――――近藤さん」」

近藤さんはどっかり座って胡座をかく。
そして、俺たち二人を見ながら言った。

「お前ら、こんなときにいったい何をやってんだ」

「…すいやせん、近藤さん……でも、土方が姉上のこと……！」

その総悟の言い分を聞いて、近藤さんは俺を見つめる。
そして、口を開いた。

「トシ、お前の気持ちもわかる。……ミツバ殿に対して、罪悪感を感じているんだろう？」

「そんなこと……」

ねェよ、そう続けたかったのだが、言葉にはならなかった。
なぜなら、近藤さんの言うことはまったくの図星だったから。
だが、と更に続ける近藤さん。

「そう思えるのは今だけだ。……いつまでも、彼女たちがこのままここにいるはずはない。…それは総悟もわかるだろう？」

総悟は唇を噛みしめる。
その現実を、認めたくないのだろう。
自分の大好きだった姉が、また自分から離れていく、という悲しい現実を。
だが総悟は、ゆっくりと頷いた。

それを見た近藤さんは、また俺に向き直る。

「そのときになれば……お前はきっと後悔することになるだろう。
……お前はもう、ミツバ殿に悲しい想いをさせたくないんだろう？
……もう、後悔はしたくないんだろう？」

……そうだ。
俺はもう、後悔なんてするのはごめんだ。
ミツバ（アイツ）が死んだあのときのように、過去の自分の行いを悔やみたくはない。
俺は大きく頷いた。
近藤さんは微笑みながら言う。

「そうか……それならば、ミツバ殿たちが生き返ったことを認めてやれ。彼女たちがいなくなるその時まで、普段と変わらずに接するべきじゃないのか？」

「……そう、だな」

俺の返答を聞いて、豪快に笑う近藤さん。
……まったく、この人にかかるとどうしてこんなに簡単に己をさらけ出してしまうのか。
この人の器量には、本当に参る。
すると、今まで口を閉ざしていた総悟が言った。

「……へっ。結局、俺の言うとおりだったってことですかィ。姉上に会いたかったっつーことだろ、土方コノヤロー」

「……総悟、テメーは黙っとけ」

「死ね土方、そんでテメーは生き返ってくんな土方」

「だから……黙っとけや総悟ォォォォォォ！！！」

そうして刀を抜こうとした俺を近藤さんが制す。

近藤さん？と言うと、総悟を見ながら近藤さんは言った。

「総悟、お前もお前だぞ。ミツバ殿が生き返ったことで、自分を見失いすぎだ。お前の……いや、俺たち真選組の、やるべきこととはなんだ？」

「……やるべきこと？」

首をかしげる総悟。

……だが、俺はすでにその答えが頭の中に浮かんでいた。

なんてことはない、簡単な問い。……といっても、真選組（俺たち）は近藤さんに恩を返したいと、近藤さんが守りたいものを守りたいと集まった集団。

中でもその想いが強い総悟が、答えに辿り着けるのか。

長い間考えていた総悟は、やがてあっと声を上げてから、言った。

「江戸の街を……江戸の平和を、守ることでさァ」

「答え出すのに時間かけすぎだ。……だがその通り。俺たちは、江戸の平和を守るならず者の集団。わかったら、早速パトロールに行くぞォ！」

そうして拳を振り上げる。

俺と総悟は顔を見合わせ、互いにため息をつきながら苦笑すると、近藤さんと同じように拳を宙に上げた。

そして、いざ行かん、そう思ったときに目に入り込んだのは、あるテレビの映像。

「…なんだ、これは……？」

それを見た俺は、呟いていた。

弾き出した答え（後書き）

やはり私には、かけもちで連載ものは荷が重いです。
なので、片方を投稿するときは片方はお休みということで。
……まあ最初からそうだったんですけど（笑）
しばらくはこっちを投稿していきたいと思います！
というか、もうそろそろ終わりそうな可能性大です↑

もう１つの連載、『家族の絆を求めて』もよろしくです（、∀、）
感想も待ってます～

赤い花が咲いたとき

万事屋では俺に神楽に神楽の母ちゃん、そして松陽先生と定春、と人数が二人増えた。
だから、少々狭く感じるような気がする。
今日はいつものように、新八が来るのを待ってからみんなで朝食をとっていた。
テレビでは、花野アナが今年の気温について説明している。

『――今年の夏は例年にも増して暑くなります。9月に入った現在も、8月と同様に最高気温を更新し続けていますので、皆さん熱中症には十分注意してください』

「…はあ？ふざけろよ花野アナ、エアコンがない万事屋でどうやって熱中症を回避できるんですかコノヤロー」

「……早くエアコン買え、ってことじゃないですか？」

「買えるならとっくに買ってるから。新八ィ、お前は万事屋に金がねーの知ってんだろ？」

「……まあ、そうですね。扇風機で我慢するしかないですね」

「無理だヨ！こんな狭いとこにこんな人数！過密にも程があるネ」

「神楽ちゃん、過密なんて言葉どこで覚えてきたの？」

ああ、もうこんな言い合いをしているだけで暑い。
聞いているだけでも暑い。
……そう、９月に入ったというのにこの蒸し暑さ。
ほんと、そろそろ涼しくなってくれたっていいんじゃないの？
じゃなきゃ俺たち死んじゃう！
神様お願いします！！！
そう思っていると、テレビに映っていた映像が急に代わり、結野アナが出てきた。
そして焦った様子で、緊急速報をお伝えします、そう言った。

『現在、日本の各地で街が消えるという異常事態が起きています。
まずはこの映像をご覧ください』

そう言って画面が変わり、どこかの街が出てきた。
誰が撮影していたのかはわからないが、こうした映像が残っているということは、その消えた街の人間ではないということだろう。
なぜならば、街が消えたということは、そこに住んでいた人も消えたということなのだから。
そして次の瞬間、まばゆい光に包まれたかと思うと、街が跡形もなく消えていた。
その街があった場所には、なぜか一面に花が咲いている。

「この赤い花……彼岸花、ですよね？」

新八が言うとおり、これはおそらく彼岸花。
だがなぜ、彼岸花が咲いたのだろうか。
その前に、あの街はいったいどこにいったのだろう。
その問いに答えるように、テレビの映像がもとに戻り、結野アナが

言った。

『えー、今のところ、街の消失と彼岸花の関連性は謎に包まれたままです。街はどうなったのか、その街に住んでいた方たちはどうなったのか、それもまったくわかっていません。……これも今、日本各地で起こっている、死した人間が生き返っていることと何か関係があるのでしょうか。――以上、結野でした』

そう言ってまた、テレビの映像は花野アナに戻った。
しばらく沈黙が続く。
俺は、口を開いた。

「……なァ。松陽先生も神楽の母ちゃんも、なんか知ってんじゃねーの？」

俺がそう言うと、顔を見合わせる二人。
そして、松陽先生が言った。

「…どうやら、神楽ちゃんの母君も私と同じようですね」

「ということは、松陽さんも思い出したの？」

「……ええ」

勝手に納得し合う二人に、少々不満に思う。
何せ、俺たちは二人の話についていけていないのだから。
新八がどういうことですか、と問うと、その問いには答えなかったが、松陽先生は言った。

「皆さん、今は何も聞かないでください。……とにかく、あの場所

に行きましょう」

あの場所、とは消えた街のことだろう。
なぜそんなことを言うのか、と疑問に思ったが、松陽先生の物言いには何か言い返せないような迫力があった。
だからこのとき、俺は頷くしかなかったのである。

＊＊＊

「うわー、ヒガンバナがいっぱい咲いてるアル！」

そう言いながら、咲いている彼岸花に触れようとする神楽。
新八はそれを制した。

「だめだよ神楽ちゃん、彼岸花に触ったらかぶれちゃうよ」

「マジでカ。……あ」

何かを見つけたのか、神楽は動きを止める。
心なしか少し嫌そうな顔をしているのは気のせいだろうか。
そして神楽の視線の先を見ると、目に入ってきたのは視界に入れたくもないむさ苦しい集団。

「真選組の皆さん！どうしてこんなところに！？」

そう言う新八に続けて俺も言う。

「……まったくだ、こんな真夏にそんなむさい格好しやがって。こっちまで暑くなるんですけど」

「……銀さん、僕そんなこと言ってないです。同意されても困るんですけど。……というか本当、なんで真選組がここに？」

新八がそう言うと、マヨラーが面倒臭そうに答えた。

「んなもん、テレビで見たからに決まってんだろ。……俺たちの役目は、江戸の平和を守ること。今江戸で起きている不可解な事件を調査するのは当然じゃねーか」

「へー……ご苦労なことで」

「テメー、バカにしてんだろ」

そう言って睨み合う俺たち二人。

それを宥めようとしたのか新八が一歩踏み出す。

そして新八が口を開こうとしたその直前に、凛とした声が響いた。

「もう、十四郎さんも銀さんもやめてください」

声のした方を見ると、その声の主は死んだはずの———総一郎くんの、姉貴だった。

「…やっぱ、アンタも生き返ってたのか」

「……ええ」

すると、近寄ってくる新八と神楽の二人。

二人とも、この人だれ？と言いたそうな顔をしている。

だが、おおよその見当はついているのだろう、まさか、と呟いた。

俺は二人に言う。

「……ああ、こいつ総一郎くんの姉貴」

「「……えええええええ！？」」

「…ちょっ、ふざけないでください銀さん！こんなおとなしそうな人が？ありえません！！！」

「そうアル！どうやったらあんなひねくれものが生まれるネ！」

「……テメーら、殺されてーのかィ？」

そう言って刀に手をかける総一郎くん。

「だめよ、そーちゃん。お友達に乱暴しちゃ」

総一郎くんの姉貴が制すと、おとなしく総一郎くんは刀を収めた。
そして、それを見つめていた松陽先生が言う。

「……さて。では皆さん、そろそろ本題に入りましょうか」

マヨラーたちは松陽先生が誰なのかは聞かなかった。
先生の雰囲気が、死人のものだと感じとったのだろう。
そして、俺は松陽先生に問う。

「……やっぱり、何か知ってんだな？松陽先生も神楽の母ちゃんも、総一郎くんの姉貴も」

すると、顔を伏せる神楽の母ちゃんと総一郎くんの姉貴。
だが、松陽先生だけは前を見据えていて。

松陽先生は言った。

「ええ。すべて思い出しました。……その、彼岸花を見て」

「「……？」」

頭に疑問符を並べる俺たち。

……そして、先生がこれから口にすること。

それは、俺たちには到底信じられないことだった。

赤い花が咲いたとき（後書き）

……さて、ここでこの場にいない人物がいます。
それは誰でしょうか？
……はい、答えは伊東さんです。
家族のところに行っているという設定です、一応。

ぶっちゃけて言うと、この話を書き終えてから、さあ投稿するぞー
と思ったときに伊東さんがいないことに気づいたんです。
書き直すのもアレだったんで、そういう設定にしました（笑）

……どうでもよかったですね。
ごめんなさーい（´；ω；`）！
それでは、次回もお楽しみに！

明かされる真実（前書き）

お久しぶりです！
最近は課題に追われていて忙しくて…
……はい、言い訳はここまでにしときます＼（＾Ｏ＾）／
それではどーぞ（＾Ｏ＾）

明かされる真実

「まず一つ。……消えたこの街はじきに戻ってくるでしょう」

「……は？…先生、それってどーゆう……？」

「今から説明しますから。少し黙っててください銀時」

そう言われて黙り込む銀ちゃん。

せんせいは続けた。

「……どうやら、この彼岸花がすべての鍵のようですね。この花を見ると、記憶が戻るようになっていた。……この花は、すべてを見ていたのだから」

「「……？」」

「まずはあなたたちに、この彼岸花について知ってもらわねばなりません」

そう言って、説明を始める。

「彼岸花は曼珠沙華とも呼ばれ、『天上界の花』という意味を持つとされています。また、墓地に多く咲くことから、死人花や幽霊花と呼ばれることもあります」

「……なんか、不吉ですね」

新八がそう言うと、せんせいは頷きながら言う。

「そうですね。……そして、彼岸花の開花期間はたったの1週間ほど。ですが、秋の彼岸と時を同じくするように開花します」

「彼岸ってなにアルカ？」

「いい質問ですね、神楽ちゃん。……彼岸とは『向こう岸』という意味です。つまり、極楽浄土を指すのですよ。逆に、此岸（しがん）は今私たちがいるこの煩悩や迷いに満ちた世界のことです」

「ゴクラクジョウド？」

「簡単に言えば、死語の世界のことです。……また、極楽浄土は西方の彼方にあるとされています」

「…あ、お彼岸って……」

そう声をもらす新八。

せんせいは微笑みながら言った。

「どうやら、新八くんは気づいたようですね。……そう、お彼岸とは春分の日と秋分の日を中日とし、前後各3日間を合わせた7日間のこと。そして、この日は太陽が真西に沈みます。つまり、極楽浄土の方角がはっきりとわかるのです」

せんせいは更に続ける。

「彼岸と時を同じくするように開花する彼岸花。言ってしまえば、あの世とこの世の最も通じやすい時期に咲く花なのですよ」

みんな、いまいち話についてこれてないのだろう。

言葉を発する者はいなかった。

せんせいは言う。

「……思い出してください。あなたたちは春分の日の３月２１日、家族や愛しき者の墓参りに行ったはずです」

「そういえば……」

そう言う銀ちゃんに、私もその時のことを思い出す。

その日は墓参りに行く日だと聞いて、私はターミナルに走った。

マミーのお墓がある、私が育ったあの星に行くことはできないけれど、せめて宇宙に一番近いターミナルで、そう思ったんだ。

真選組の連中はまだ思い出せていないのか、黙ったままだ。

だが、サドの姉ちゃんが言った。

「……皆さんちゃんと来てくれましたよ、ボロボロの体で。お仕事の後だったんでしょうね。……私、すごく嬉しかった」

「「……」」

「……そう。そしてあなたたちは思い出したはずです、愛しき者と過ごした過去を。……そんなあなたたちを見て、死人も願ってしまったのです。もう一度、愛しき者に会いたいと。…そして、そんな人間を見ていた彼岸花……極楽浄土と最も心が通じやすい時期に咲

くこの花は、あなたたちや私たちのそんな願いを叶えてしまった」

「……そんな連鎖が、あんたらを生き返らせちまったっつーのか」

そう言うトッシーに、せんせいやサドの姉ちゃんが頷く。

せんせいは更に続けた。

「……始めに、この街はもうすぐ戻ってくると言いましたね」

「…松陽先生、まさか……」

「そう、彼岸花の花が枯れる……つまり彼岸が終わるとともに、この街は戻ってきます。……そしてそのとき、私たちもあるべき所へと還るのです」

それを信じられなかった私は、マミーを見つめた。

けれどマミーは、肯定するように頷いただけであった。

そんなマミーを見ても、信じることができなくて。

「……嘘ヨ！！！」

「……俺もまだ、信じられねー。松陽先生がいなくなっちまうなんて、そんな話」

「銀ちゃんの言う通りネ！……それに私、マミーとさよならなんて絶対いや「だけど」

私は銀ちゃんが何を言おうとしているのかわからなかった。

顔色を窺おうとしたが、銀ちゃんは俯いたままだ。

銀ちゃんはそのまま言った。

「現にあんたらは生き返っちまった。認めたくなくても、認めるしかないんだよな」

「……なに言ってるアルカ！？銀ちゃん！！！」

「……神楽、わかるだろ？死人はこの世にいられねーんだ。このままじゃ、どんどん街が消えちまうんだよ」

「知ってるヨそんなの！それでも私はマミーとさよならしたくないだけアル！銀ちゃんは……銀ちゃんは、せんせいとさよならしたいアルカ！？」

すると、口を閉ざす銀ちゃん。
誰も何も言葉を発さなくて、長い沈黙が続いた。
そして、銀ちゃんは顔を上げて、言った。

「……そんなわけねーだろ。ずっと、会いたかった」

「だったらなんでヨ！？」

「……やめろ、二人とも」

そう言って私たちを制したのは、真選組のゴリラ兼ストーカー。
ゴリラストーカーの分際で生意気な、そう思っていると、トッシーが近藤さんの言う通りだ、と私たちを見ながら言った。

「……まァ、俺もお前ら同様、最初は迷ってた。自分はどーするべきなのか、死人が生き返ってるのを認めるべきなのか、ってな」

「そーいや、めちゃくちゃテンパってましたねィ土方さん」
「……お前は黙ってろ総悟。……とにかく俺もそう思ってたわけだが、近藤さんに言われた。『後悔したくないのなら、最期まで普通でいろ』と」
「普通で……？」
私が呟くと、トッシーはそうだ、と言いながら頷く。
「それが死人の……消えゆく者たちの、最期の願いなんだよ」
そう言われて、私はまたマミーを見た。
マミーは静かに頷く。
まるでトッシーが言ったこと、それが『正解』だと言うように。
そんなマミーを見て、私はようやく決心がついた。
「……わかったアル、トッシー。……私、『今』を大事にするヨ」
「ああ」
「銀ちゃん。……私、これでいいんだよネ？」
「……そうだな」
そう言って、みんな黙り込む。
……やっぱり普通でいるのは無理なのかな、そう思っていると。
「……にしてもマヨラー、お前そんなにテンパってたの？情けねーなァオイ」

「なっ……！んなわけねーだろーが！！！」

「いやいや旦那ァ、そりゃあすげーテンパりでしたぜ。見てくだせェよコレ、傑作でさァ」

「うわっ、何コレ！総一郎くん、コレ写メったの？なんで写メっちゃったの？」

「総悟でさァ。……ああ、隊員にばらまこうかと思いましてねィ」

「…その携帯……こっちによこせェェェェェ！！！」

そう言って携帯を取り上げたトッシー。
その画面を見て、トッシーは凍りついた。
なんだろうと思い私も画面を覗き込むと、そこに写っていたのはなんの関係もないただの待ち受け。
固まっているトッシーに、銀ちゃんとサドは言った。

「「うっそ〜」」

「…こんの……ドSコンビがァァァァァ！！！」

ブチッと血管が切れる音が聞こえたかと思うと、そう言いながらトッシーは刀を抜いて二人を追いかける。
そして、二人は逃げる。
そんな三人を見ていた皆は、いつの間にか笑いに包まれていて。
ああ、これが『普通』なんだなあって実感した。
そして、私もそれに仲間入り。
笑っているマミーをちらりと見て、なんだか嬉しくなった。

……あと1週間。
それだけしかないけれど、今を精一杯楽しもう。
それがマミーの……みんなのためにもなるのだから。

明かされる真実（後書き）

この話は事実をもとにしたフィクション、というやつです。
実際は彼岸花が人を生き返らせることができるなどということは有り得ませんし、銀魂の世界だから有り得るんだな、と割りきっていただければと思います。
どうして今年の彼岸に生き返ったのか、来年も同じように生き返ってしまうのか、という疑問もあると思います。
答えは『ＮＯ』です。
詳しい設定は考えてなかったので答えられませんが、もう二度と死人が生き返ることはありません。

繰り返しますが、この話はフィクションです。
二次創作なので当たり前なんですがね（笑）
それでは、次回もお楽しみに！

死という恐怖、生という恐怖（前書き）

ああああああ！！！
またお久しぶりになってしまったあああああ！！！

ごめんなさい！
忙しかったんです（，；ω；、）

それではどーぞ！

死という恐怖、生という恐怖

「……伊東が消えたらしいじゃねーか」

そう言うと、ミツバはそうですかと俯きながら言った。
そして、私もそろそろかもしれないですね、なんて言って笑った。
どうやら、死人がもといた場所に戻るのには個人差があるらしい。
目の前にいる、こいつもそう。
もしかしたら明日突然消えてしまうかもしれない。
…いや、もしかしたら今この瞬間も……。
すると、ミツバは言った。

「なんだか変な感じだわ。もうすぐで十四郎さんともそーちゃんとも……真選組の皆さんと別れなければいけないのに、全然寂しくないの。また会えて嬉しい、言いたいことも言った。悔いはない、って私の心が言っている気がするの。……薄情な女ね」

「…お前は……死ぬのが、怖くねーのか？」

するとミツバは空を見上げた。
俺も同じように空を見つめる。
……雲ひとつない晴天。
まるで、ミツバの心を表しているようだった。
そしてミツバは言う。

「怖くない、って言ったら嘘になるかもしれない。でも一度死んでるもの。恐怖なんて薄れてるわ」

「……」

「……今の私は、生きる方が怖いの」

そう言うミツバの顔は、少しだけ曇っていた。
どうやら本当に生きることの方が恐ろしいようで。
普通、人間は死を恐れるもの。
一度死んだこの女は、いったい何を思うのか。

「……私、生きていた頃は病弱だったでしょう？」

そう問われ、俺は静かに頷いた。
生前の彼女は感情の起伏が大きいと、倒れたり吐血したり、なにかと病弱だった。
それにもかかわらず体に悪い辛いもの（一味唐辛子など）をとっていた。
……まあ、マヨ党の俺からすればわからなくもない。
死んでもマヨネーズは手放さないだろう。
そう思っていると、ミツバは続けた。

「それなのに、今の私は何事もなく生きてる。まるで、病弱だった過去をリセットされたように。……だから、またあの苦しみをすることになるんじゃないかって、怖くなるの」

「……ミツバ、」

「いいの、十四郎さん。何も言わないで。……言ったでしょう？悔

いはないって」

「……」

俺が黙っていると、ミツバはまた空を見上げた。
太陽は沈みかけ、青かった空は夕日で赤みがかっていた。
ミツバはすっと立ち上がると、俺に向かって言った。

「……十四郎さん、そーちゃんに伝えておいてください。あなたの姉は、いつでもあなたを見守っていると」

「……行くのか」

「ええ。もう、十分生きたもの。十四郎さんも体に気をつけて」

そう言って、ミツバは俺に背を向けた。
……このまま行かせていいのか、そう思った。
このままでは、あの時と同じ。
このままでは、俺はきっと、また後悔する。
そう思い、ミツバを引き止めようとしたときだった。

「…ッ……姉上！！！」

振り返ると、そこには息を切らした総悟が立っていた。
ミツバを心配して、任務後すぐに駆けつけたのだろう。
総悟は言った。

「…姉上……また、俺を置いていっちまうんですかィ？」

ミツバは振り返らない。

俺たちに背を向けたまま、口を固く閉ざしていた。

「……姉上」

「……」

「…ッ……あね「そーちゃん」

ミツバの肩は、小刻みに震えていた。
……泣いているのだろう。
愛する弟と二度も別れなければならない辛さは俺にはわからない。
だが、この強い女は、力強く声を発していた。

「あなたは……もう、私がいなくても平気なはずよ？」

「姉上……でも、俺は「当たり前よね」

ミツバは振り返った。
目を赤くして、涙を流しながら。

「あなたは、私の弟なんだから」

そう言われて、総悟は俯いた。
そしてゆっくりと、だが確かに頷いた。
それを確認したミツバはにっこり微笑んだ。
総悟の頭を撫でようと手を伸ばしたミツバ。
……だが、その手はピタリと止まった。
見ると、ミツバの手は半透明になっていて。

「ミツバ、お前……！」

「……もう、時間みたいね」
姉が消えかかっていることに気づいた総悟が顔を上げる。
そして、消えていないもう片方の手を強く握った。
「……二度目のさよなら、ね」
「姉上……！」
「そーちゃん……私、そーちゃんのことずっと見てるわ。ずっと、そばにいるから。だから……悲しまないで」
総悟が握っていた手はもう消えてしまっていて。
それでもミツバは、俺たちに伝えようとしていた。
「…そーちゃん、十四郎さん……私、幸せだったわ。あなたたちにもう一度会うことができて。…ずっと見てますから……私のこと、忘れないでくださいね」
「……姉上！」「ミツバ！」
「二人とも……愛してる、わ」
その言葉を最後に、ミツバは消えていった。
消える瞬間、ミツバは穏やかに、幸せそうに笑っていた。
あの頃と同じように。
悲しむなと言ったミツバの言葉を守ろう、そう思った。
頬を伝う暖かいものを無視して。

今日は９月２１日。
あまりにも早すぎる、二度目の別れだった。

死という恐怖、生という恐怖（後書き）

そろそろ終わるかもです。
次かその次ぐらいに。

母の言葉

「――神楽、私ももう、限界みたい」

そう言ってマミーは、私とつながっていた手をゆっくりと離した。
マミーの温もりを感じられなくなった私は不安で、必死に手を伸ばすもむなしく宙を掴むだけであった。

「待ってヨ、マミー！何が限界アルカ！？今のマミー、昔よりずっと元気そうなのに、ッ……」

私は息を飲んだ。
目の前にいるマミーの体が、少しずつ消えていくではないか。

「……マ、ミー？」

「…神楽……私がこの世にいることが、限界だってことよ」

そう言って、マミーはまた私から離れようとする。
消える瞬間を見られたくないからなのだろうか。

「マミー、待ってヨ！私、昔みたいに泣かないから……！だから、最期まで一緒にいさせてヨ！」

「確かに、あなたは強くなった。……でも、それはできないわ」

「…なんでヨ、マミー！」

「もう一度だけ、家族全員と暮らしたかったけど……それももう無理みたいね。お父さんと神威によろしく言っておいて」

「マミー！！！」

「神楽、もっともっと強くなりなさい。……力じゃないわ。心を、よ？」

そして、消えかけていたマミーの体は完全に消えてしまった。
私がマミーに触れることもなく。

「マ、ミー」

『かぐら、もっとつよく――』

＊＊＊

そこで私は、はっと目が覚めた。
びっしょりと汗をかいていて、髪も張りついてしまっている。
夢だったことに安堵のため息をついた。
そして私は、隣で寝ているマミーを見る。
……だが、マミーが寝ているはずの布団を見て、冷や汗が流れた。
マミーが、いないのだ。
私の隣に。
嫌な予感が頭の中を駆け巡る。
布団を触ってみると、そこにはまだ温もりがあって。
トイレにでも行ったのだろう、とか割りきれたらよかったのだが、

そんなことできなかった。
和室から出て、トイレを覗き込んだ。
明かりは点いておらず、トイレには誰もいない。
銀ちゃんが寝ている部屋からは、銀ちゃんのいびきだけしか聞こえない。
それから押し入れだったりリビングだったりいろいろと探したのだが、やはりマミーはどこにもいなくて。
残るは玄関のみで、私はマミーがそこにいることを願った。
恐る恐る玄関に行くと、そこには一人の人物が立っていた。
暗くてよく見えないが、髪の長い人物のようで。

「マミー？」

私がそう呼ぶと、振り返ったその人物。
だが、その人物は私が探していたマミーではなかった。

「――おや、神楽ちゃん。どうしました？こんな夜遅くに」

「……せんせい」

玄関にいたのは、銀ちゃんの先生の松陽先生だった。
先生は玄関から月を眺めていたようで。
なぜこんな時間に、と不思議に思った。
そして、先生しかそこにいないということは、マミーはもういないんだと認めるしかなかった。

「マミーは……もう、いないんだよネ？」

「……はい」

「せんせいは知ってたアルカ？……マミーが今日、いなくなるってこと」

「いいえ。……ただ」

「ただ？」

「彼女が先ほど、私の夢枕にでて言ったんです。自分はもうすぐいなくなるだろうから、神楽ちゃんのことをよろしく頼むと」

「……マミーも馬鹿アルナ。そんなの銀ちゃんか新八に頼めばいいのに」

「そうですね。いずれは私も消えてしまう身なのですから」

そう言われて、私は口をつぐむ。

……先生も死人で、もうすぐ消えてしまうのだ。

身近な人が急にいなくなるのは、もう耐えられない。

「……せんせいは、いついなくなっちゃうアルカ？」

「わかりません。その時がくるまでは」

「……」

「……神楽ちゃん、忘れないでくださいね」

「……何をヨ？」

先生は開いていた玄関の扉を閉めてから、ゆっくりと私に近寄る。

サンダルを脱いでから私の目の前に立っていた先生は、私をぎゅっと抱きしめた。
そして、言った。

「…神楽ちゃん……夢で見たんでしょう？お母さんが離れていくのを」

「……ウン」

「その時、お母さんが神楽ちゃんに遺した言葉があるはずです」

そう言われて、私はマミーの言葉を思い出した。
強くなりなさい、という言葉。

「これから先、その言葉を決して忘れないでください。……そうすれば、お母さんはいつでも神楽ちゃんの傍にいますから」

「ッ…ウン……！」

先生の腕の中で、私は泣いた。
涙が枯れてしまうんじゃないかってくらいに。

……マミー、泣かないって言ったのに、また泣いてしまってごめんなさい。
でももう、これが最後だから。
これから先、強く生きるから。
マミーが言った通り、もっともっと強く。
だからどうか、私を見守っていてください。

母の言葉（後書き）

次回で最終回です！

……たぶん（；＾ω＾）？

いつかまた輪廻の果てで（前書き）

とうとうきました！
最終話です＼（＾○＾）／
それではどーぞ！

いつかまた輪廻の果てで

「……あと、残ってんのは先生だけなんじゃね？」

「そうかもしれませんね」

土手に座って川を眺めながら、後方にいる先生に言うと、あっさりと肯定の言葉が出てきたから少し驚いた。

……だが、本当にそうなのかもしれない。

神楽の母ちゃんも新八の親父もババアの旦那も、みんな消えちまったらしい。

周りで生き返った奴らは松陽先生以外みんな消えた。

おそらく、松陽先生ももうすぐ……。

そう思っていると、銀時、と呼ぶ声がした。

振り返ると、松陽先生が微笑んでいて。

「……なに？」

「なんでもありません」

もうすぐ自分も消える、とかそんなことを言うとばかり考えていたものだから、少し拍子抜けした。

なんだよ、と口を尖らせながら、また川を眺める。

手元に転がっていた小石を掴んで川に投げた。

ポチャン、と小さな音がして、小石は水の中に沈んでいった。

それを見届けてから、俺は松陽先生に言った。

「……そーいやさ、あの町。なんであの町が消えたわけ？」

あの町とは、以前テレビで放送していた、消えてしまった町。
町があった場所には彼岸花が咲いていて。
松陽先生は、いずれあの町は戻ってくると言っていたが。
先生は言った。

「……バランスが、とれなくなったからです」

「バランス？……なんの？」

「死者と生者のバランスです」

先生は淡々と語っていった。
生き返ってしまった人数が多すぎてバランスがとれなくなった。
そこで、その人数に相当するあの町が消えたのだと。

「今思えば、気の毒なことをしました。私たちの代わりに、住人たちはあの世にいるのですから。きっと困惑していることでしょう」

「……え？あの世にいんの？」

「ええ。…どうかしましたか？」

「別に。……ただ、あの世に行けるなら、一度行きてーなって」

どうしてですか？と問う先生。
本当はわかってるくせに、とも思ったが、俺は言うことにした。

「……見てたんだろ？俺たちが攘夷戦争に参加してたの」

「……はい」

「その時、守りきれなかった奴らが大勢いんだよ。……だから、もう一度会って謝りてェんだ。守れなくてすまなかった、ってな」

そうですか、と先生から返事が聞こえた。

「……銀時、私は嬉しいです」

「何が？」

「銀時が他人のために何かをすることが、です。……それは、あなたの魂が言っていたことなのでしょう？」

「……まあね」

「生徒の成長を見ることができるのは、教師にとってこの上なく嬉しいことです」

「いつまでもガキ扱いすんなよ、先生」

先生はふふっと笑って、子供扱いなんかしてませんよ、と言う。

「……ですが銀時、忘れないでください。私はあなたの先生で、銀時は私の生徒。それはこれからも変わりません」

「そんなことわかってらァ」

「それはよかった」

俺が手のひらの上で小石を転がしていると、先生はいつの間にかその小石を俺から奪っていた。

銀時もまだまだですね、と先生は微笑むと、川に向かって小石を投げた。

小石は一定のリズムをとりながら水の上を跳ね、やがて沈んでいった。

さすが先生、そう思った。

先生は手の汚れをパンパンと払うと、思い出したように言った。

「そういえば銀時、彼岸花の花言葉って知ってますか？」

「知らね。花言葉自体あんま知らねーし」

「じゃあ考えてみてください」

「……全然わかんねー。ヒントくれよ」

「ヒントですか？そうですね……私が成し遂げたこと、ですかね」

そう言われるが、皆目見当もつかない。

いくら考えてもわからない気がしたので、ギブアップした。

今度は花言葉の勉強をしてください、と先生は微笑んだ。

「もったいぶらないで教えてくれよ、先生」

「……そうですね。彼岸花の花言葉は――――」

先生がそう言ったとき、強い風が吹いた。
その間、目をつぶっていた俺は風が止むと、先生に言った。
「あ～びっくりした。……なァ先生、風で何にも聞こえなかったからもう一回――」
顔を上げた俺の目に映ったのは、川だけだった。
「……先生」
先生は消えてしまっていた。
花言葉を伝えることなく。
後で知ったことだが、彼岸花の花言葉は『再会』のようで。
先生が成し遂げたこと、それは再会なんだと知った。
……先生、あんたは成し遂げたかもしれないが、俺はまだだ。
ずっと先になると思うけど、俺がそっちに行ったときには、快く迎えてくれよな。
生まれ変わっても、俺は先生の生徒として生きたい。
そんな『再会』をしたい。
――いつかまた輪廻の果てで、巡り逢えることを祈って――
～Ｆｉｎ～

いつかまた輪廻の果てで（後書き）

この小説の連載を終えて、まず一言。
……話を考えるの難しかったあああああ！！！
この小説は海底くらげさんの『ＩＦ』をもとにしたんですが、話の内容が濃くていろいろと矛盾が生まれたりしてしまったんです。
彼岸花だったりお彼岸についてだったり、もう調べに調べました。
調べれば調べるほど、『ＩＦ』の中にあった本当の意味が少しずつわかってきて。
解釈が変だったところもあると思いますが、とにかく無事に終われてよかったです／（＾○＾）／

そして、海底くらげさん。
小説の連載を許可してくださりありがとうございました。
また、たくさんのアドバイスや感想なども送ってくださり、感謝しています。
無事に連載が終了できたのは海底くらげさんのおかげでもありますから！

感想もたくさんの方が送ってくださいました。
本当にありがとうございます！

もう一つの連載小説、『家族の絆を求めて』もよろしくお願いしますね！
それでは、次回をお楽しみに！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4415r/

例えばもう一度あなたに会えるとして、

2011年10月6日22時27分発行